

社会参加への架け橋となる新聞記事を活かした授業のあり方

継続できる取り組みを目指して

長野県木曾青峰高等学校 平 林 洋 一

1 本校のNIEの現状

(1) 学校全体での取り組み

本校は2007年、木曾高等学校と木曾山林高等学校が統合し設置され、現在「定時制普通科」「全日制普通科・理数科・森林環境科・インテリア科」の5学科、600人余りが学んでいる。本校でのNIE実践は現在3つある。

① 教科

今年度NIE実践校指定をうけ、社会科が新聞の活用・公開授業を担当した。

② 図書館

小論文対策、総合的な学習で活用できるように、記事の活用方法・利用効果などについての説明が図書館前に常時掲示されている。司書教諭が資料の提供など相談に応じている。

③ 学年

1学年ではHRの時間にコラムの書き写し(「天声人語」)に取り組んでいる(不定期)。目的は「良い文章を読む機会を増やす」「文章を構成する力を身につける」「語彙・読解力を高める」点にある。マス目に書き写すことに加えて、余白部分を利用してコラムに用いられている間違えやすい漢字の練習、回数を重ねるにつれてコラムにタイトルを本文の語句を引用してつけるなど、内容に変化を加えている。

今後はコラムを読み共感する文章・疑問に思う文章に線を引く、コラムに対する自分の意見を指定された字数で書く欄を設け、自分の考えを発信できる段階に進みたい。書き写しができる時間が限られているので、その分、生徒は集中して取り組んでいる。

書き写しの効果については「文章を読み解く力は『漢字』よりも『語彙』が必要」であり、「語彙・読解力は国語のみならず、他教科との相関性も極めて高いのですべての教科の学力向上に必須」なので「新聞を『毎日読む習慣』をつけることが語彙・読解力の向上に重要」との分析(田中2011※注1)がある。継続して取り組むことが読解力や語彙を伸ばすことにつながると考えている。

(2) 生徒と新聞

高校1年生を対象に2011年4月、2012年3月に実施した「あなたは、新聞を見ていますか」に対する回答は次のようであった。

	4月	2月
毎日	26%(8人)	23%(7人)
週に数回	23%(7人)	27%(8人)
週に1回	10%(3人)	10%(3人)
月に1・2回	26%(8人)	23%(7人)
見ない	16%(5人)	16%(5人)

アンケートへの回答を見ると、「毎日」「週に数回」見ている生徒と「週に1回見ている」「月に1・2回見

ている」「見ない」生徒を比較した場合、新聞に対する考え方に違いが見られる。新聞を見る機会が多い生徒は新聞を「情報を得るためには必要不可欠なもの」「(他のメディアと比べて)一番見やすい、納得する書き方をしている」「世界の動きを知ることができる」など必要性や信頼性をあげている。一方で「見ない」生徒は「ネットがあるから読まない」「おずかしい」など利便性が高い他のメディアに関心を持ち、新聞を敬遠する傾向が見られる。

「物事を知る・判断する」場合に利用するメディアとして「インターネット」と答える生徒の比率が新聞に比べて高い。その理由として「必要な情報が簡単に得られる・探しやすい」「たくさん情報が早く出てくるから」「使いやすい」ことをあげている。こうした世相の中で、新聞の活用をすすめることが逆に「新聞嫌い」の生徒を生み出さないように注意することも必要である。

## 2 NIE実践のねらい

### (1) 新聞記事を活用した授業づくり

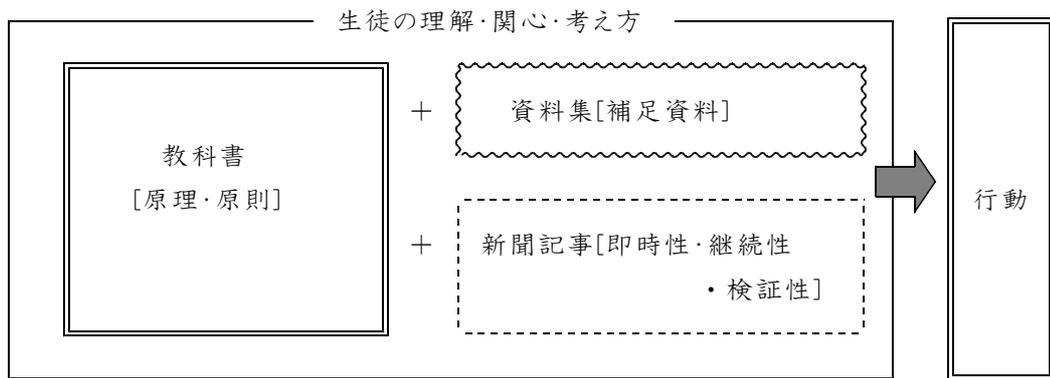
新聞を「信頼できる授業づくりのパートナー」として位置づけている。その理由は2つある。

#### ① 即時性・継続性があり、生徒の授業に対する興味・関心・理解を高めることにつながる。

新聞記事は、教科書、資料集では限界がある最新の出来事に関するデータ、工夫を凝らした図解・解説を掲載している。また過去の出来事に対するシリーズなど継続性・検証性の点において他のメディアとは異なる特性を持っている。教科書で扱われる原理・原則について学んだことが、実際の社会とどのように関連するかを合わせて考えることで、生徒は授業内容や実際の社会を身近に感じ関心を持つきっかけとなる。

少子高齢社会、財政問題、東日本大震災の復興・支援、エネルギー政策、TPP加盟問題などの今日的な課題についてこれからの社会を担う生徒が当事者意識をもつ第一歩は問題の存在を知ることである。「クラス・クラブといった一定の固定化された空間」以外でも、自分が民主主義社会を担うかけがえのない一員であり、諸課題に向き合うことが求められているという自覚を、記事を活用することで促すことができる。問題の存在を知り、「社会の一員として果たすべき役割や責任について自覚を深めさせ(注2)」、解決に向けて行動できる力が今日求められている。

新聞記事を選択・配布する際には、生徒が「適切な基準や根拠に基づく論理的で偏りのない考え方」「建設的で前向きな考え方」をもち「他者の存在に対して思いを寄せる」ことができるように心がけている。「適切な基準や根拠に基づく論理的で偏りのない考え方」については、記事の選択の時点ですでに教師の解釈が入っていることを考え、生徒自身の解釈をできるだけ白紙に近い状態から始めることができるように、配布する記事には線を引かないようにしている。自分のフィルターで記事を通して実際の社会に向き合得るようにするためである。「建設的で前向きな考え方」「他者の存在に対して思いを寄せる」ことに関しては、同世代の考えが載っている投書欄や、人物・生き方に関する記事を取り上げ、生徒の想像力・共感する力を豊かにすることを目指している。



② 多様性を生かし、生徒の考えを深められる。

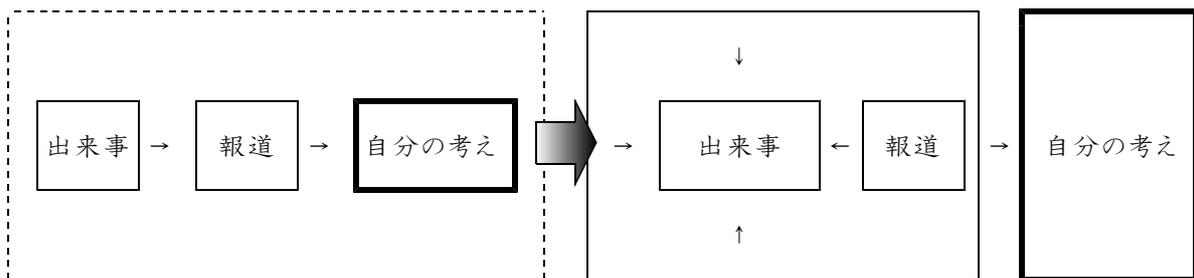
NIE実践のポイントの1つに記事の比較ができることがある。生徒は1つの現象にも多様な視点が存在していることを容易に実感できる。その一例として上野千鶴子氏の「9・19脱原発集会とメディア報道」(「信濃毎日新聞」2011・10・3掲載)を授業で用いた。

「9月19日、『さよなら原発5万人集会』が開かれた。…主催者発表は6万人、警視庁発表が2万7千人。この数字は違いすぎる。…(中略)…こんな歴史的な出来事を、翌日のメディアはどのように報道したのだろうか？ 全国紙5紙のうち、朝日と毎日には1面に写真入りでとりあげ、読売と産経、日経は社会面に写真なしの記事、このうち毎日はヘリコプターによる空撮で会場のあふれるような人並みの景観を掲載した。地方紙では東京新聞が大きく空撮写真を1面に大きくとりあげ、社会面にも関連記事を載せた。信濃毎日新聞も共同通信配信の写真入り記事を1面にとりあげた。このメディアの温度差は大きすぎる。…」

記事から一部抜粋

記事に関連した2011年9月20日付けの各紙を黒板に貼り並べてみた。集会に対する報道の違いは明らかであり、震災後の状況に対して関心を持っていた生徒はとても驚いていた。「多様な視点の存在を実感」する経験を積み重ねることで、目の前にある情報に対する受け止め方や自らの考えをこれまでと異なる視点を通して掘り下げていきかけとなる。

最近の「わかりやすい二者択一」を示し、道徳観に訴える言葉を多用することを支持する傾向が強まる中で、物事を一面的でなく、多面的にとらえ考えていくことが一人一人に求められているのではないだろうか。記事の比較は生徒が自分の考え方を見つめ直すことにつながる。



### 3 研究の概要

#### (1)実践した教科 1年社会科(公民科)「現代社会」

新聞で学ぶ……新聞を単元のねらいや本時の主眼を達成するための教材として位置づけ授業に取り入れている。

区分(分)	教師の指導内容	生徒の学習内容	指導上の留意点
導入 (5分)	<p>◆新聞記事の紹介。</p> <p>①最近の出来事に関する記事を配布する。生徒が実際の社会に対する興味・関心を持つきっかけを提供する。</p> <p>②前時の授業に関連する記事の重要語句を[ ]にしたり、出来事の背景・要因について記事から関連する箇所を抜き出したりすることで生徒の授業内容の理解を深める。</p>	<p>◆新聞記事を読む。</p> <p>①新聞記事を読み、実際の社会の問題を知り、取り上げている事柄について考えるきっかけをもつ。</p> <p>②学んだ内容に関する重要語句・原則の確認、リアルタイムの出来事と学んだ内容を関連づけた復習を行う。</p>	<p>◆新聞の重要語句を[ ]にしたり、背景・原因・方法・影響など記事の文を抜き出して答えさせる形式の問いを設ける。</p> <p>◆社説などの主張性が強い記事については、最初に生徒自身の解釈を優先するため、教師の解釈を示すことによる線を引かない。</p>
展開 (40分)	<p>◆本時で取り上げる内容について教科書・資料集・新聞記事を用いながら説明をする。特に現在進行中の出来事に関する新聞記事は生徒が記事に目を通せる時間の確保する。内容や時間から、記事をそのまま読み上げるだけでなく、リード文または見出しを紹介したり、概要を教師が口頭で説明するなど生徒の様子をみて取り上げ方を決定する。</p>	<p>◆授業内容に関連のある具体的な事例を新聞記事を通して理解する。</p>	<p>◆記事の内容について発問し、生徒の理解を深める。</p> <p>◆記事の扱いは全体を紹介すると時間的に厳しくなる場合があるので、見出し・リード文の紹介に特化し、「余韻」を残し、先に進める場合もある。</p>
まとめ (5分)	<p>◆本時の内容の確認</p>		

#### (2)新聞の提供状況

##### ①補助教材として配布

記事は「グラフ」「図解」「即時性」「検証性」を重視して選んでいる。記事は授業プリントの裏面に印刷することが多い。たとえ首相の似顔絵一枚であってもイラストがあると生徒はその内容について距離感が縮まるようである。保管については特に指示をしていない。

## ②SHRで配布

書き写しで用いるコラムの他、生き方を紹介した記事をSHRや学年通信を通して配布する。記事には日常生活では知り得ない多くの生き方が紹介されており、教師(私)の話以上に考え方・行動・目標実現に向けての意欲などに影響を及ぼす。たとえば今年の「阪神淡路大震災」の翌日に、東日本大震災で亡くなった1人の女性にまつわる記事「最後までわかっていたら」(2012年1月18日朝日新聞掲載)を配布した。これは生徒に改めて自分が生きている時間・空間・他者の存在について感じてほしいと取り上げた。

学級日誌には共通のテーマ(「東日本大震災・栄村大地震」、「私のとっておき」、「今年の決意」)を設け、共通のテーマについては5行以上書くように指示し、お互いの考えの交流の場となることを目指している。2学期に「3・11を震災を風化させない」という意味を込め「震災」をテーマに設定したが、前述のような記事を読み重ね生徒の想像力・共感力を耕していきたい。

今後は1つの記事を取り上げ、学級日誌でも互いに考えを発信・受信しあい自分の考えを総合的に見つめる場として活用する方策も試みたい。

## (3)新聞を取り入れた実践をする上で特に工夫したこと

### ①タイミングを逃さない

1年「現代社会」のGDP(国内総生産)を学ぶ授業では、授業当日の朝刊に掲載されていた人口数(労働力)の推移に関する記事を用いた。一面トップ記事の見出し、リード文、人口推移のグラフ、2面掲載の平均寿命の予測図を配布した(2012年1月31日朝日新聞掲載)。生徒が人口減の中、「経済成長」にどのように向き合えるかを、人口減の影響をふまえて考えるきっかけにした。「今日の朝刊には・・・」という鮮度もも生徒の興味を引き出す上で、1つのポイントになる。

### ②取り組みやすい方法の模索

本校は1つの学年に4学科併置されており生徒の様子は各科によってそれぞれ異なる。書き写しをクラスの実態に合わせて取り組めるように、係が人数分印刷し、用意していた方法を、何種類かの書き写し原稿を用意し、担任が適宜印刷し利用する方法に変更した。今後、履歴書・志願理由書・面接・小論文入試など進路に直結する場面でも自分の考えを伝えるかに活用できることを説明しながら入学から卒業まで継続して取り組めるよう担任団の意思統一を形成できるかがカギである。

## 4 研究のまとめ

### (1)学校重点目標との関係

- 2011年度木曾青峰高校学校重点目標(関係部分のみ掲載) -----
- ①学力の充実をはかり、生徒それぞれの進路希望実現を目指す。
  - ②生徒の自主性・社会性を涵養し、規律正しく生活することができ生徒会活動・クラブ活動等活発に行えるように指導する。

新聞記事は授業に幅や躍動感をもたらす可能性を備えた教材であることを今回の実践を通して改め

て認識した。学力の充実を図る上でさまざまなアプローチがあるが、新聞記事を用いた授業実践は学力の向上に不可欠な語彙・読解力の育成、社会の抱える問題解決に向けての必要な思考力・意欲の育成においても有効である。

高校には実際の社会の仕組みを体系的に学ぶ最後の段階となる生徒も多く存在する。記事を読み社会の実像を知り、現在進行形の出来事、解決すべき課題、人々の生き方に触れる経験を重ねることは社会を担う一員を送り出す側として果たすべき責務である。記事は、生徒がこれからの社会を担う一員としての自覚を持ち、自己を活かしながら世の中に貢献していくという視点にたって進路選択を考える可能性をもっている。にもかかわらず新聞記事を生徒の社会参加への架け橋になるように教材としての活用には至っていない。工夫したことを共有する場を校内で整備する段階が求められる。

## 5 残された課題

### (1) 点から線、線から面へ……NIE実践の広がり

バラ色に描かれていた21世紀の社会は幕を開けてみると多くの課題が存在している。よりよい社会を形成するために、問題解決に向けて生徒1人1人が持ち味・能力を発揮するよう多面的な視点で課題に向き合い、自分の考えを検証し、行動に移すことができる力が求められている。これからの民主主義社会を担う生徒に日々の生活の中には、意識しないと目には見えないが、早急に対応・解決策が求められている課題が存在することを記事を通して伝え、よりよい社会の中で生きるために、当事者意識をもって課題克服に向きあえる環境を整える上で新聞は有効である。「トップ記事」「社会面」などが身近に感じられる機会を提供し続けていく必要がある。今後高校では一個人としての取り組みから集団で取り組む態勢づくりを、NIEの拡充という点で考えていかなければならない。

### (2) 質の高いNIEの実践

昨年夏に開催された第16回NIE全国大会(青森)で基調講演された児玉忠弘氏(弘前大学教授)は、「質の高いNIEを実践していかないとNIEへの信頼を失う」と述べている。質の高いNIEとは何か。その実現に向けて児玉氏は「新聞で学ぶとどんな力がつくのか(学力論)」「新聞のどこに注目して授業をすればいいのか(教材論)」「新聞を使ってどんな授業をすればいいのか(授業論)」に関する検証を提起されている。

NIE実践が、啓蒙期から拡充期に向かっている現在、個人的には旧態依然とした取り組みからの脱却を目指さなければという焦りがある。普段着の授業実践のバージョンアップを図りながら「学力論」「教材論」「授業論」についても検証していきたい。考えたことが行動に現れる・行動が変化することが学力が定着したか否かの指標になる。この点で現在不十分な自分自身の取り組みを解決に向けて行動できる力という段階まで引き上げることが、NIEの魅力を伝え、広がりにつなげることになるだろう。

#### ※出典

(注1) 「語彙・読解力検定」の合格者・不合格者のアンケート結果・分析

「語彙や読解力指導の成果検証について ～「語彙・読解力検定」のデータ分析結果」より

((株)ペネッセコーポレーション 名古屋支社 田中勇輝氏)

(注2) 2013年度実施 新学習指導要領解説書 「特別活動」

※今年度NIE購読紙

9月～10月	「朝日」「信濃毎日」「日本経済」「読賣」
11月～12月	「中日」「毎日」「産経」(「長野日報」配達地域外)

